広島大学附属三原学校園研究紀要　第３集　2013　pp. 161-166

国　語　科

読解における「活用型」授業の展開に関する研究

―「走れメロス」と「人質」の比較読みを通して―

西　木　英　里

1　はじめに

本研究は，「知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力」を養い培う授業とはどのような授業なのかという具体的な方法論を明らかにするために，太宰治作「走れメロス」を教材に用いた読解の授業展開を分析することを目的とする。

いまだ「知識・技能を実生活に活用する力」を測定するPISA調査から，回復傾向にあるが読解力や記述式問題に課題があるとされている。また，「数学が役に立つか，数学の授業が楽しいか」という質問項目が参加国のなかで最低ランクであった結果から，学ぶことの意味を子どもたちに理解させる教育の必要性が強く感じられる。今学んでいる内容が日常生活や現実社会の中でどのように生かされているのか，自分の将来にどのように影響してくるのかを理解させるような学習が必要である。さらに，読解教材が実生活の場にいかされるような内容が多く取り上げられるようになってきているが，この意図は学んだ読解力を実生活にいかす応用力に重きを置きだしたからである。このことから，「読解を通して，知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力を養う活用型の授業の具体的な展開」の研究は重要であると考える。

そこで，読解を通して「活用力」を養い培う授業の具体化には，PISA調査の，情報の取出しとテキストの解釈，熟考・評価，自己の意見を表現する活動を積極的に取り入れることはもちろんのこと，テキストのテーマと自己の感性や価値観とを照合し，その優先順位を意志決定させていく。つまり，理解したことを「表現」するのは「活用」の一歩ではあるが，その表現のさせ方を工夫していかなければならないと考える。「発表すれば」，「作文すれば」表現したことになるわけでなく，何のために表現しているかの「目的意識」や，「相手意識」が重要である。したがって，情報の取出しや解釈の時点から，生徒にとって興味関心を持たざるを得ない，またはやらざるを得ない「目的意識」を持たせておく必要がある。

また，既習事項である体験から感じたことを表現したり，事実を正確に理解し伝達したり，情報を分析・評価したり，論述したりする等の表現活動に至るには，「論理的」に「熟考・評価」と同時に，「感性的認識」における「熟考・評価」も大切であり養うべき力だと考える。新しく創造するには直感やひらめきによるところも大きいと思われ，テキストに書かれた内容を自らの経験に位置づける場合，子どもの内面の感性や意志と照合する作業が行われる。この意思決定を自己表現させていくのである。

以上のことから，

①情報の取出しとテキストの解釈，熟考・評価，自己の意見を表現する活動といった，一般的に「活用型」と言われる授業展開における，生徒に対して提示する「目的意識」を子どもの実生活に影響するような目的，あるいは興味関心の強くやらざるを得ない目的を開発・分析していく。

②「論理的認識」と「感性的認識」との統合を図るべく，論理だけで読解するのではなく，生徒の感性やひらめきを表現する場面を仕組み，「感性的認識」も高めることができる学習指導開発を行っていく。

2　研究の方法

(1) 対象生徒

本学校園の中学２年生１クラスの子ども 39 名を対象に調査を行った。小集団の数は９グループであり，各小集団の人数は，４名構成が６グループ，５名構成が３グループであった。

(2) 調査時期

事前アンケートを９月初旬に行い，本単元は 11 月初旬から授業実施後，事後アンケートを行った。

(3) 授業構成

調査対象とした単元は「走れメロス」であった。授業計画は次のとおりである。

第１次　太宰治「走れメロス」を読む（１時間）
第２次　メロスが大切にしているものとディオニス王の処刑から人物像を捉える（２時間）
第３次　シラーの「人質」と比較しながら読みを深める（３時間）
第４次　様々な登場人物の立場に立つ（２時間）

(4) 授業の概要

「走れメロス」は一見単純なストーリーとして捉えられるが，作品解釈が難しい小説である。人物像の読み取り方に不慣れな生徒は，表面的な解釈にとどまってしまう。そこで，考える課題を毎時間明確にし，ポイントをしぼった指導を展開していくことにより，「目的意識」を持たせることとした。そして，安易な読みにとどまりがちな生徒たちに，人間の複雑さを感じさせながら，生徒の感じたことやその変化を表現する機会を持たせた。

またこの作品は，シラーの「人質」をもとに書かれているが，太宰治は大幅な書き替えを行っている。「人質」と読み比べ，二つの作品の異なる点について考えることによって，主題や構想に関わる学習課題が生まれ，読みの目的を持つことが出来た。そして，登場人物に寄り添いながらも，作家太宰治の書き換えの意図を論理的に考えさせていった。

では，授業の具体について述べる。まずは，一読後の事前アンケートの，「一番印象に残った場面」について最も多かったのが『メロスとセリヌンティウスが殴り合い，抱擁した場面』で 15 人，次いで『再び立ち上がり，無我夢中で走り続けている場面』が 10 人であった。殴り合うことやあきらめずに再び走り出すことが，生徒にとっては意外な展開だったようだ。また，「クラスで意見を交流したり，明らかにしたりしたい課題」を挙げさせそれを毎時間の授業の課題や中心の話題とし進めていった。生徒から出た代表的なものは次のとおりである。

・なぜ（何があって），王は人を信じることができなくなり，王は元から人を信じていなかったのか。 ・なぜ，セリヌンティウスはすんなり人質になったのか。
・セリヌンティウスと王の三日間の心情。 ・山賊は本当に王の手下なのか。 ・なぜ王は山賊をメロスの所に行かせたのか。
・途中，裏切りそうになったメロスがどんな気持ちでまた走り出したのか。 ・なぜ，フィロストラトスはメロスにもう走らなくてもいいと言ったのか。
・王の最後の「仲間にしてほしい」という言葉は，なぜなのか。 ・その後王はどのように変わったのか。
・悪人は誰か。 ・登場人物をそれぞれどう思っているのか。

第１・２次では，「人物関係図（メロスマップ）」に主な登場人物のメロス，ディオニス王，セリヌンティウスの三人について読み取れたことを記入していった。そして，メロスが大切にしていることとディオニス王の処刑から二人の人物像を捉えていった。この「人物関係図」から，本文から読み取った人物解釈を記入し，それらを図式のようにしたり比較したり類似を考えたりし，それを根拠に自分の意見を持たせるようにした。

第３次からは，シラーの「人質」と比較しながら読みを深め，読解の視点を登場人物から作者に移していった。

第４次では，様々な登場人物の立場に立って考えるために，「走れメロス」の内容を主な登場人物と作者と生徒の視点で新聞を作成させた。

3　結果と考察

第１・２次での，「人物関係図（メロスマップ）」に主な登場人物メロス，ディオニス王，セリヌンティウスの三人について読み取れたことを記入する活動を通して，初期段階では，メロスとディオニス王が正反対の人物であり，メロスが絶対的な善でディオニス王が悪であるという考えであった。図１にあるように，メロスとディオニス王は正反対を表す「↔」で示された。

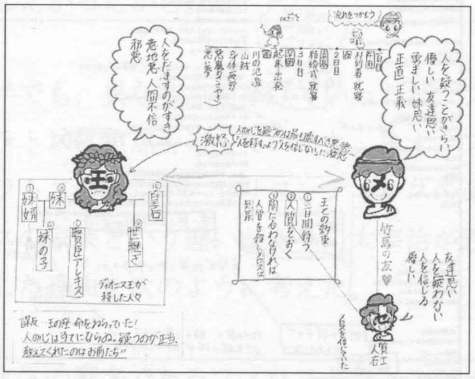

図１　人物関係図　生徒のワークシート①

そして，メロスが大切にしていることとディオニス王の処刑から二人の人物像を捉えていくにしたがって，単純にメロスとディオニス王を善と悪だと言えなくなってきた。生徒から出されたクラスで意見を交流したり，明らかにしたりしたい課題の１つである「なぜ，道で会った若い衆は王のことを言わなかったのか。」について考えていくと，生徒から次のような発言があった。

- 若い衆の次に聞いた年寄りにはしつこく聞いたし，体を持って激しく揺さぶって聞いたメロスは本当に優しいのだろうか。
- 若者にはしなかったのに，年寄りには強気に出るなんて本当に正義の勇者なのだろうか。

生徒は本課題よりも，メロスの相手によって態度が変わってしまった点について「正義」や「善」であることについて疑問を持ち始めた。

また同様に，「なぜ王は人を信じることができなくなったのか」「王は元から人を信じていなかったのか」については，王が処刑を行った順番について考えていくと，図２のような考えが出てきた。

- 初めに妹婿を殺したのは他人だし，王の座を狙っていて暗殺を目論んでいたから。
- その次に殺された世継ぎは，王の座を狙ってくるだろうし，父親（ディオニス王）が死ねば王座の継承者となるから。
- 妹を殺したのは，妹婿の敵をとられては困るから。
- 妹の子どもを殺したのは，両親の敵を取られては困るし，この人も王座の継承者になるから。
- 皇后（妻）は，自分の子どもを殺されたから夫であっても敵を取られてそうだから。
- 賢臣は，頭が良くて良いが王の暴挙に対して反発しかねないから。

図２　人物関係図　生徒のワークシート②（一部）

つまり，ディオニス王に対して謀反を企て，暗殺しようとした人（妹婿）がいたから，周囲の人が信じられなくなり自分の命と地位を守るために処刑を繰り返しているのではないか。その根拠の１つとして，ディオニス王が「疑うのが正当の心構え。それを教えてくれたのはお前たち。」という発言をしたことから何らかの周囲の裏切り行為があったに違いないという考えを交流した。

メロスと王が対峙する場面では，「メロスは激怒した」が２回書かれており，何に激怒したかを考えた。これが，メロスが大切にしていること，つまりメロスの「価値観」について考えることとなった。はじめは生徒の感覚で「王が人を殺す」ことに対して激怒しているという意見が出されたが，会話文を中心に読み進めていくと，人を殺す

ことを知ったときのメロスは，激怒より驚きの方が大きく，メロスの心情が怒りの頂点に達した原因は「人を信じないこと」だということに結論付けていった。

ここまででメロスとディオニス王の異なる価値観，「人の心を疑うのは最も恥ずべき悪徳」と「人を疑うのが正当の心構え」とする両者のぶつかり合いについて読み取っていった。この両者の価値観について，メロスを善・ディオニス王を悪としてきた生徒の考えが次のように変化していった。

- 人を疑ってはいけないけれど，信じすぎて裏切られるのは怖いから，ディオニス王の言うことも分かる。
- メロスの言うように人を疑うのはいけないことだけど，ディオニス王の人間不信の原因が周囲の人の裏切りや命を脅かされたことからくるものなら理解できるし，自分もそうなると思う。
- ディオニス王の平和を本当は望んでいるという発言に対して嘘つきだと思ったが，人間不信になる原因があったなら，その発言も本当だろうし，でもそうはできない現実も本当なので，自分はどちらの考えも分かるし賛成も反対もできない。言ってみれば，ディオニス王というより，妹婿とか周りの人が悪い。

第２次までで，生徒の物語を読む視点（感情移入する者）が，メロスの視点に立ってディオニス王の悪や友人を助ける必死さを感じていたのから，ディオニス王に寄り添う気持ちが出てきたり，自分ならどうするかなど考えたりして，メロスの視点から他の人物の視点に立ったり，客観的に話の内容を考えたりするようになってきた。さらに，生徒から出された課題の「山賊は本当に王の手下なのか。なぜ，王は，山賊をメロスのところに行かせたのか。」について意見交流をした。本文に書かれていないので真偽のほどは分からないが，「山賊が王の手下」と仮定し，次のような考えが出て，ディオニス王に寄り添う気持ちが揺れたり離れたりしていった。

- もし王の手下だとすると，メロスを殺して，そのことを知らないセリヌンティウスや世間の人々に，「メロスとの約束」を逆手に取りメロスが裏切ったと悲しむふりをして，自分の考えが正しいと主張しようとしている。最悪だ。

第３次から，「走れメロス」の元となったシラーの「人質」と比較しながら読みを深めていき，読みの視点を登場人物から作者に移していった。前後半に分けて本文と比較し，異なる点を挙げさせた。形式・文体に関する違いと内容・設定に関する違いが挙げられ，本授業では，内容・設定に関する違いを取り上げて授業を進めていった。

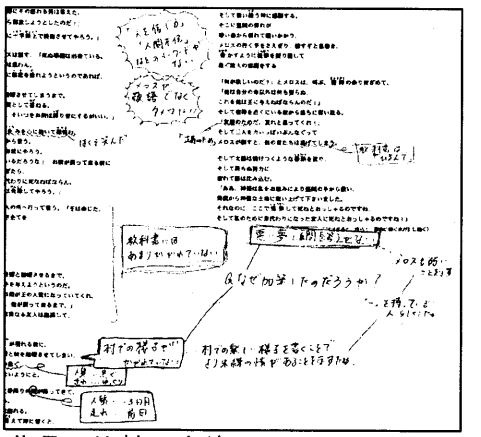

図３　作品の比較　生徒のワークシート（一部）

前半では，妹の結婚式など「村での場面」の長さや，「困難・試練の場面」の文章量の比率等異なる点はあるが，困難の３つ目であるメロスの「悪い夢」が「人質」には描かれていないという点に重点を置き，考えていった。

まず，王城から戻って以降のメロスの様子が「人質」よりも詳しく書かれてあることで，メロスの性格がよく表れている。村での楽しい様子を書くことでより未練の情や，メロスの弱い部分を示すことができる。また，友の命がかかっているにもかかわらず，寝過ごしたり，のんびり歩いて鼻歌まで歌ったりしている。「人質」にはないこの様子は，もし自分がセリヌンティウスなら許せないという生徒は多く，逆に「人質」のメロスは，初読で感じた，絶対的な善人として物語は進んでいく。では，なぜそのようなエピソードや「悪い夢」を加筆していったのか。次のような考えが出た。

- 太宰治が書きたかったのは「善人の中にも隠されている悪」であり「どんな人間にも悪がある」ということだったから。

・いくら人を信じると言う人でも人間は人間だから，マイナスの感情もあると伝えたかった。
・メロスは「良い人」だけでなく裏の「勇者に不似合いな性格」であることを伝えたかった。
・メロスが良い人ってわけじゃない。良い人の中にも悪がある。
・メロスの気持ちを変えたかったから加筆した。マイナスの部分をだして，ディオニス王の考えに近づけるため。
・この部分があるだけでメロスの印象が変わり，王と同じ人間としたかったから。・太宰治の考えを入れて人間関係を複雑にしたかったため。
・シラーの書いたメロスよりもっと複雑なメロスにしたかったから。

後半でも，異なる点を挙げていったが，フィロストラトスに焦点を当てていった。まず，フィロストラトスの設定が，セリヌンティウスの弟子とメロスの家来という違いがあり，太宰治が設定を変更した理由を次のように考えた。

・メロスの家来であるフィロストラトスがメロスに「走るのをやめてください」と言うのは，主人を助けたいから当たり前のことだ。
・フィロストラトスの弟子にすることで，恨み言を言いながらも，もうセリヌンティウスの命はあきらめて，２人が死ぬよりはせめてメロスの命だけでも助けたかった。
・両方ともメロスが間に合えば，メロスが死んでセリヌンティウスが解放されるけど，「人質」では，フィロストラトス自身のためにメロスを助けようとしている気がする。
・セリヌンティウスの弟子にしたほうが，人間の黒い部分を書くことができるから。・人の心の中に黒があり，自分中心に考えてしまうかもしれないが，実は白の部分もあり，人のことを本当に思いやることができる「人」の二面を表したかった。

生徒は，セリヌンティウスを助けてほしい立場の人がメロスが走るのを止めることに，深い意味を感じ，多くのことを想像することができたようだ。そして，フィロストラトスが登場する意味・役割について考え，次のような意見が出された。

・メロスが真の勇者であっても，人に恨まれ，悪人になることがあることを示している。
・メロスが何のために走っているのかを考えさせる役割。
・メロスのせいで罪のないセリヌンティウスが死ぬということをせめる役割。忠告する役割。
・メロスがどれくらいセリヌンティウスのことを強く思っているか友情を試すため。
・メロスの心の強さを示すための実験台。
・第二の悪魔のささやき。
・メロスの心を揺るがせる最後の敵や壁。

このフィロストラトスの役割を考えることによりメロスが何を大切にし，何を守るために走り続けたのかを考えることができた。第４次では，「走れメロス」の内容を各視点から新聞を作成した。

図４　メロス新聞①（全体像）

図４のように，新聞のタイトルや見出しを考え，どの立場の視点をトップ記事に持ってくるか等は各自に任せた。

図５　メロス新聞②③④⑤（メロス・セリヌンティウス・作者）

図６　メロス新聞⑥（民衆）

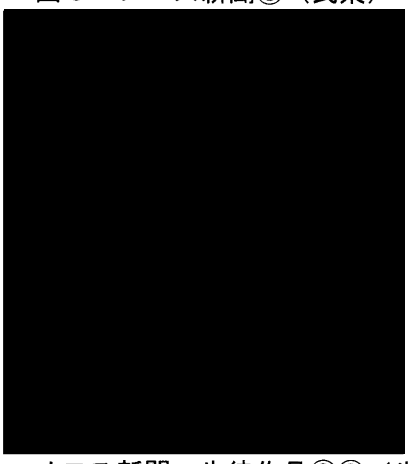

図７　メロス新聞　生徒作品⑧⑨（生徒）

メロスがなぜフィロストラトスに止められたのに走り続けたのか，セリヌンティウスがどのような気持ちでメロスを待っていたのか，ディオニス王がどんな気持ちで改心したのか，客観的な立場でこの事件を見ていた民衆はどうなのか，太宰がこの作品を書いた理由とは，物語を通して自分は何を思いどう感じたのか。それぞれの視点に立ち，物語を根拠に自分の考えを記述していた。

４　結論と今後の課題

学習の様子や事後アンケートから考察する。

まず，事前アンケートと同様の質問「一番印象に残った場面」について最も多かったのが『メロスとセリヌンティウスが殴り合い，抱擁した場面』で 12 人，次いで『再び立ち上がり，無我夢中で走り続けている場面』が９人であった。事前と結果としては同じであったが，人数はやや減少し他の場面が印象的であったと回答する生徒が増えた。

印象に残った理由としては，事前事後で大きな変化はなかった。『殴り合い，抱擁した場面』であれば，「お互いの良くない場面を認め合い，殴り合っていた」や「普通の物語なら抱擁するだけなのに殴り合っている」のような理由が挙げられた。また，『無我夢中で走り続けている場面』では，「フィロストラトスがでてきて，メロスをとめようとした」や「メロスの悪さと良さがすべて出ていた」「走れメロスの山場だし，タイトルのような場面だ」のような理由であった。

また，共感・興味を持った登場人物は，セリヌンティウスが 17 人で「メロスの突然「人質になってくれ」というお願いも聞き入れたし，メロスのことをとても信じていた」から，次いで「人を簡単に信じてはいけない」等の理由でディオニス王が 14 人であった。

クラスで意見を交流し，明らかにしたい課題にもあった，登場人物の中で一体だれが本当の「悪人」だったのかについては，メロスが 14 人で「自分ではいい人だと言っているのに，何回もあきらめそうになったしセリヌンティウスを裏切ろうとしていたからメロスは良い人じゃない」や「自分のためだけに自分の親友を人質にするなんて最低」という意見が挙げられ，ディオニス王の 10 人は「人を簡単に殺しすぎた」という理由が主だった。

さて，本研究の大きな目的の一つである，授業展開における，生徒に対して提示する「目的意識」については，毎時間登場人物の人物像や背景を焦点化して根拠ある広い解釈をすることで，授業の導入と終末では，登場人物についての思い・人物評価が変化していくため，物語を読み解いていくことに対して興味関心は持たせることができた。

また，「論理的認識」と「感性的認識」との統合を図るための生徒の感性やひらめきを表現する場面として，まとめの新聞に取り組んだ。これは授業のまとめとしてはしっかり物語を解釈し，自分の意見を持たせることが出来た。しかしながら，感性やひらめきといったことと，国語科で求める力の両方を満たす活動であったかどうかは疑問が残る。

まず，感性やひらめきをどう解釈するかをもっと研究していかなければいけないことが，今後の課題である。